



392

講談社現代新書

日本の古典②

王朝人のころ

もののけ信仰が強かった平安期には、貴族たちは

歌合せに興じて、不安をまぎらせながら一夜を明かすことがあった。
また、美しい姫がいるときけば、女房を通じて

歌を書き送り、姫は自分の氣にいった歌の贈り主に、
返歌するのが恋愛の儀式であった。王朝人にとって、
文芸の心得は、毎日の生活に深く根ざしていた。

「源氏」をはじめとする、王朝期の古典を賞味しながら、作品の

成立過程や、生活のしきたり、ものの考え方を知る

ことは楽しい。本書は、そのための格好の手引きである。

玉上琢弥



王朝人のこころ 日本の古典②

昭和五〇年五月二八日第一刷発行 昭和五三年五月一五日第二刷発行

著者——玉上琢弥

© Takuya Tamagami 1975 Printed in Japan

発行者——野間省一 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—三—三 郵便番号二三 電話〇三—六五—二二 振替東京八—三

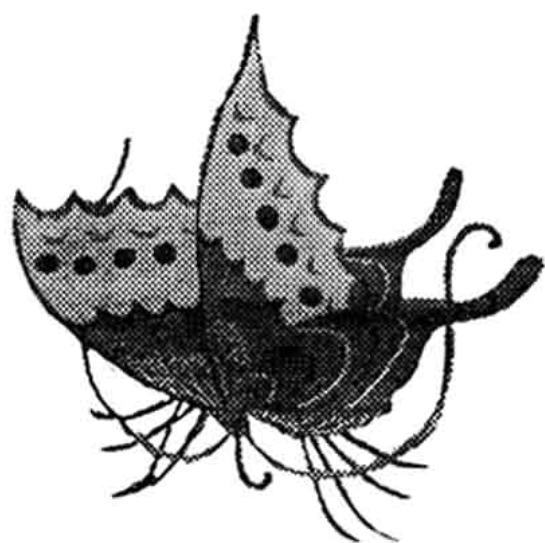
装幀者——杉浦康平・海保透

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

●——定価はカバーに表示してあります

落丁本・乱丁本はおとりかえします

玉上琢弥



朝人のこころ 日本の古典②

講談社現代新書

まえがき

時と所を異にする文学作品を理解しようとするばあい、その作品を生んだその当時の生活がわからないために、理解できなかったり誤解したりすることがある。困ることの一つだ。

中古文学は、千年むかしの京都に生まれた作品である。同じ日本の土地であるが、やはりむつかしいものである。

当時の人はひと言いわれればわかることも、今のわれわれにはわからず、気づかなかったり誤解したりする。それどころか、当時の人ならよくわかるものだから、一言いちごんもしないことさえ多い。

一例をあげよう。

物語のクライマックスは、男と女の「御対面」おほんたいめんの場である。男君はかきくどき、歌をよむ。

女君は返歌する。今の対話が、当時は和歌の贈答であった。だから『源氏物語』の歌は、日常会話のようなもので、芸術的な和歌作品とは違うのである。勅撰集にとられた歌と比べると『源

『氏物語』の歌は芸術的に劣るといわざるをえないのは、だから当然のことなのである。そういう説明がされる。それはそれでよろしい。歌といえど皆おなじだと考えるより数等まさった考え方である。晴はれの歌、けの歌などともいうようになった。展覧会出品の絵と日曜画家が楽しんでかく絵と、というようなものである。

さて、男が歌をよみかけ、女が答える。その逆もある。宮仕え人が宮廷紳士によみかける場合だが、男の方で急に返歌が浮かばなかったら、聞こえないふりをして問いかえせ、そして返歌の案じがついたところで聞きとれた顔で答えよ、と、これは歌学書にかいてある。

紳士は簀すのこ子にいるし、女房は簾すだれ中うちにいる。簾のすぐそばにいたのでない。簾の奥には几帳もある。よほど「はし近か」であっても、男とのあいだは二メートルは離れよう。広い部屋に住む貴族は、いつも大声を出すというが、いくら大声でも聞きとれないこともある。なんと、なんと仰せられる、と問い返しても不自然でない。あ、さようか、しからば、と、落ち着いて上五文字をしらずと吟ずる。吟じながら次の七文字を考えてよいのである。

歌は、普通と違う言い方をするのである。『源氏物語』総角あけまきの巻に、歌を「ことばのやうに」とある。夕霧の巻に、女君が低くひとりごとといった歌を、男が聞こえなかったところを想像で補って「うち誦ずし給たまふ」とある。

今のように、相手に聞こえるようにいう、理解できるような言い方をする、そういう必要はないのである。

男が歌をよみかけ、女が返歌する。つい今の世の会話のように思ってしまう。そうでない。あいだに取り次ぐ女房がいる。男が歌を言い入れると、簾中の女房がそれを伝えに母屋もやの奥にいざってゆく。女君は女房たちに取りかこまれている。そこで男君の歌を披露し、女房一同鳩首凝議して、返歌するときまれば、歌の上手な女房が返歌を案じ、取り次ぎの女房が廂ひさしの間までいざってゆき、簾外の簀子にいる男君に伝える、という手順をふむ。

夕霧の巻。小野の山荘に、一条の御息所みやすどころの病氣見舞に夕霧の大將が来る。御息所は北の廂にいる。娘の女二の宮は母屋の奥にいる。せまい家で、みじろぎする「御衣その音なひ」を耳にしたかと夕霧は思う——それほどの夜の静寂しじまである。

「あなたの御消息せうそこかよふほど、すこし遠う隔たるひまに、例の、少將の君など、さぶらふ人々に物語などし給ひて」北廂の御息所に口上を伝えるのが、離れていて暇がかかる。そのあいだ夕霧は、涉外係の女房少將の君たちと話をかわす。恨まれて女房は、女二の宮に御挨拶をと願う。その挨拶の言葉を女房に取り次がれて夕霧は、「『こは宮の御消息か』とゐなほりて」いずまいを正し、すわりなおして、とある。女房相手のときの姿勢を改めるのである。

夕霧と御息所の対話を取り次ぐ時間が長いこと、そのあいだ女房たちが相手していること、あいだにほかの対話がいりうるほどであることがわかる。

ずいぶん気の長い話だと思うだろう。

しかし考えてみると、今のわれわれの生活にもこんなことはあるものである。たとえば通勤通学の時間である。はじめての時は、ずいぶん長く感ずるものだ。電車の窓の外に注意し、駅の一つ一つに注意し、乗りこさないよう注意する。しかし、すぐ馴れてしまうもので、そうなると、いつのまにか目的の駅に着く。通勤通学の時間は、特別のばあいのほか、消えてしまう。女房の取り次ぎの時間のように。そして特別のばあい、いつもと違うことがあったときだけは、意識にのぼるのである。

そういう生活の中から生まれた作品である。そういう生活の中にこの作品をおいて味わうことができたなら、読みは深まるであろう。一つ一つの語が文が、奥行きをもって見えて来、立体的に動き出すであろう。

そういう読み方ができたらと思ひ続けていて、こんな本ができたのである。序説はとばして、具体的な話をするところから読んでいただきたい。

千年むかしの生活をしのぶために、そのころの絵巻物から少しばかり選んで載せた。現物を

見られるのが一番よいが、いずれも国宝で特別のときでなくては見られない。よい複製もできていることであるから、文学作品とともに見ていただきたい。文学が生きてくる思いがされることであろう。

一九七五年四月

著者

目次

序章—平安時代の文芸——11

1 —中古の漢詩文 12

2 —仮名文学の勃興 15

3 —女流仮名文学の盛行 25

4 —和歌の復興 34

5 —中古の歌謡 40

1 章—仮名文学の成立——43

1 —漢詩と古今集 44

2 —日本語による歌 54

3 —女のものとなった和歌 58

4 —結婚の条件 63

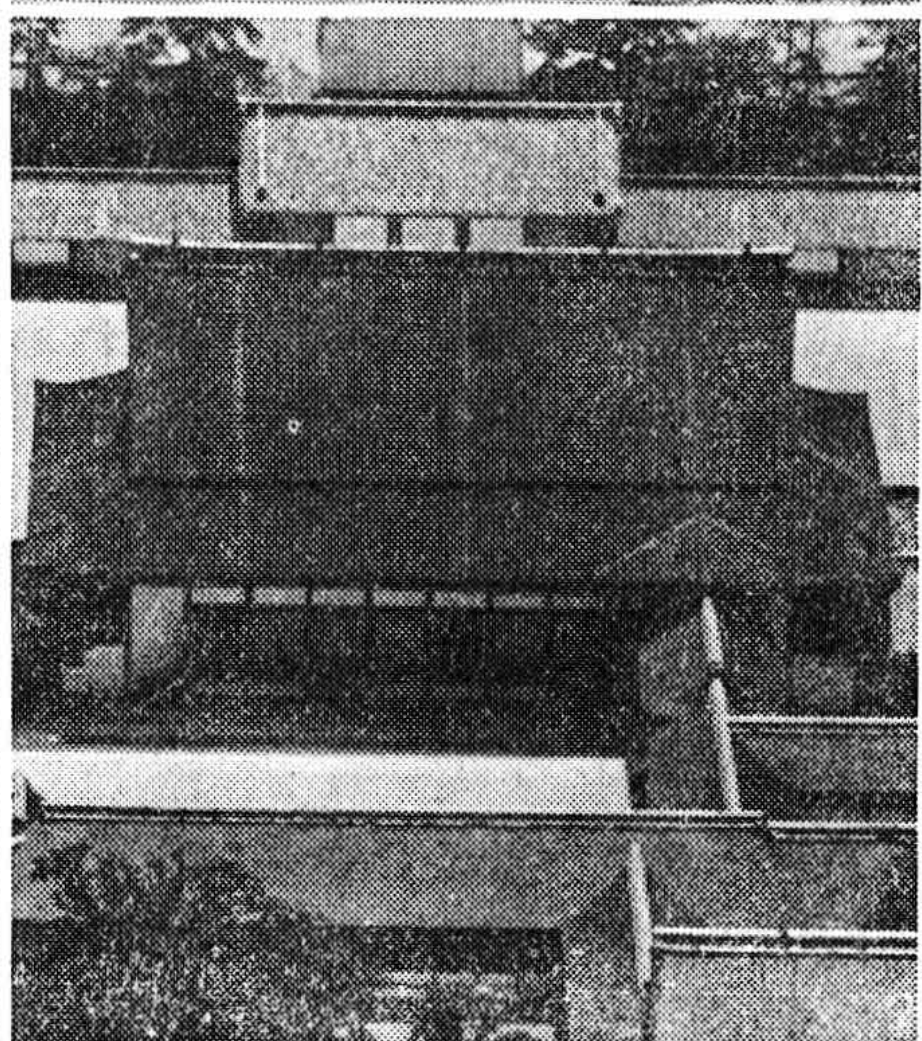
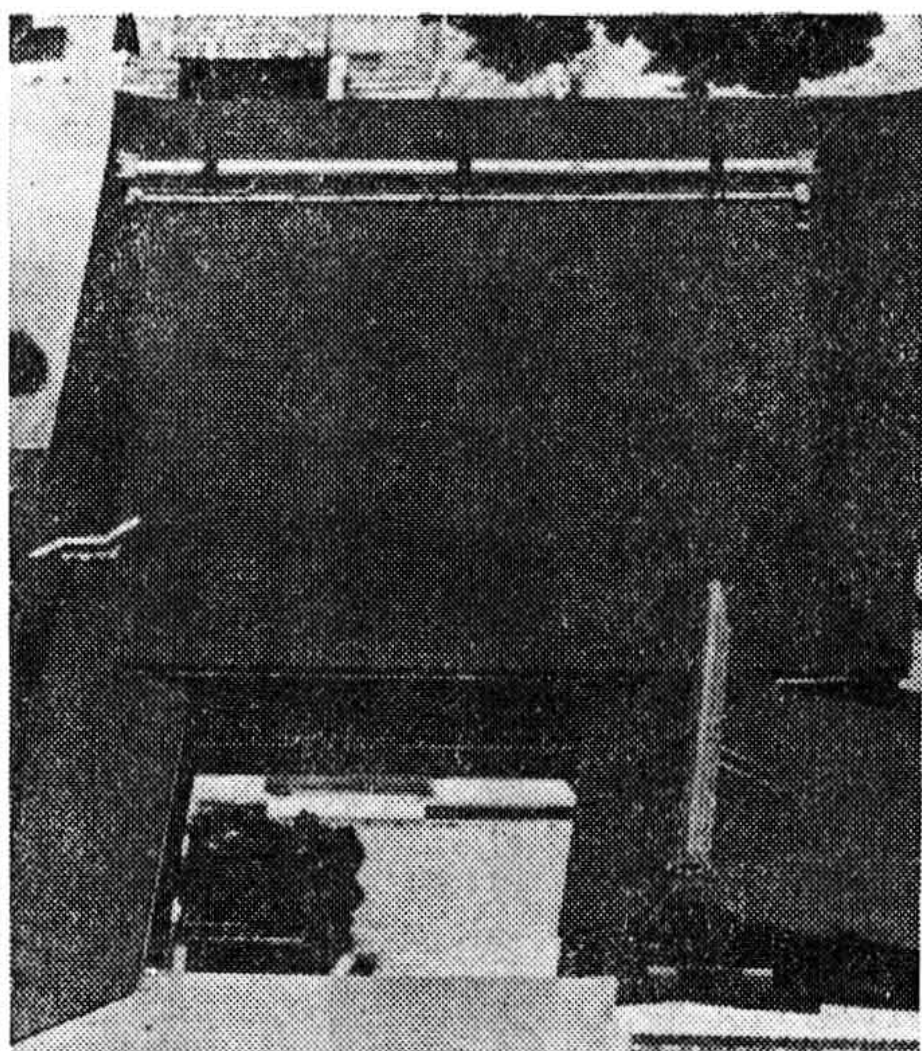
5 —和歌の技巧 68

2 章—女流仮名文学の試み—75

1 —和歌と仮名文 76

2	— 日記の実用文	82
3	— 自然と装束の描写	97
4	— 作り物語の発祥	104
3 章	『源氏物語』の読み方	115
1	— わかむらさき	116
2	— 伊勢物語と源氏物語	128
3	— 源氏物語の粹	141
4	— 主題としての若紫	153
4 章	男の仮名文学	163
1	— 話し手の技巧	164
2	— 下敷きとなった源氏物語	173
3	— 春の夜の夢の浮き橋	178
年表		185
索引		191

京都御所へ航空写真・長谷章久博士撮影・藤壺Ⅱ上 紫宸殿Ⅱ下



序章—平安時代の文芸

1 — 中古の漢詩文

序 説

中古は、桓武天皇が平安京に遷都せられた延暦十三年（七九四）から、源頼朝が鎌倉に幕府を開いた建久三年（一一九二）まで、約四百年間をいうのが普通である。

政治も文化も平安京（五七ページ地図参照）を中心としたから、平安時代とも呼ぶ。

戦乱はほとんどなく、宮廷の貴族は武を棄て文を事とし、文芸は花と開いた。仏教が当代の思想界を独占したといつてよいが、その仏教も、貴族の現世享樂に奉仕して、加持や医療に力を注いだ。が一面、その深遠な教理を以って文芸に影響を与えたことも少なくない。この時代は、情を何よりも重んじたが、教養に努め極端に走ることを嫌い、そのうえ、中国の古典を模範として、文章を練ったから、作風は古典主義的と言える。

漢詩文の隆盛

桓武天皇が、都を奈良から京都に移されたのも、旧勢力と断つて、新しい時代を作ろうとされたからである。革新は、先進国の文物を受け入れることであつた。文学も、漢詩文を尊んで、和歌和文は公おおよけの席上には出されなかつた。このころを国風暗こくふうあんた。

黒時代こくじだいという。嵯峨天皇（七八六～八四二）の勅による詩文集として、天皇の御代に『凌雲集』（凌雲新集ともいう、一卷）および『文華秀麗集』（三卷）、淳和天皇の御代に『経国集』（二十卷、現存六卷）が引き続いて出た。詩文筆蹟で嵯峨天皇と併称された僧空海（弘法大師・七七三～八三五）は、若いとき『三教指帰さんこうしき』を作り、渡唐三年で帰朝してのち、詩論書たる『文鏡秘府論ぶんきょうひふろん』（六卷）、その要約の『文筆眼心抄ぶんびつがんしんしょう』（一卷）を編し、詩文集の『性靈集しやうりやうしゆ』（十卷）を残している。その後、都良香みやこのよし（八三四～八七九）に『都氏文集』、島田忠臣（八二八～八九二）に『田氏家集』があり、宇多天皇の御信任が厚かった菅原道真すがわらのみちざね（八四五～九〇三）は、六国史りつこくしを分類して『類聚国史るいじゆうこくし』（二百五卷、現存六十一卷）を編し、『菅家文草かんけぶんそう』、『菅家後草かんけこうそう』を残している。勅撰の国史・法制の書、いずれも唐を手本にした華麗な文章である。

勅撰国史

- 『続日本紀』四十卷 桓武天皇の十六年（七九七）撰進 文武天皇より桓武天皇までの歴史
- 『日本後紀』四十卷 嵯峨・淳和・仁明天皇の勅撰 桓武天皇より淳和天皇までの歴史
- 『続日本後紀』二十卷 清和天皇の貞観十一年（八六九）撰進 仁明天皇の歴史
- 『文徳実録』十卷 清和・陽成天皇の勅撰 文徳天皇の歴史
- 『三代実録』五十卷 宇多・醍醐天皇の勅撰 延喜元年（九〇一）撰進 清和・陽成・光孝三

天皇の歴史

以上を『日本書紀』に合わせて六国史りつこくしという。

法制

『弘仁格』こうにんきやく 十卷 『弘仁式』 四十卷 『内裏式』 三卷 嵯峨天皇

『令義解』りやうぎのぎげ 十卷 淳和天皇

『貞観格』 十二卷 『貞観式』 二十卷 清和天皇

『延喜格』 二十卷 『延喜式』 五十卷 醍醐天皇

その後の漢詩文の消長

醍醐天皇の御代に至って『古今和歌集』が勅撰され、詩文はやや現われなかつたが、村上天皇の御代には復興の機運があり、大江朝綱おおえのあさつな（後江相のちのこうしよう）

公・八八六（九五七）菅原文時ふみとき（菅三品かんさんぽん、道真の孫・八九八（九八一）兼明親王かねあきら（前中書王ぜんちゆうじよう、醍醐天皇

皇子、中書王は中務卿宮の唐名・九一四（九八七）などが輩出したけれども、大陸との国交がなくなり、彼の土かをふみ風土と人物にまじわることがなくなったから、精神をえず形式に流れる傾きになったのはどうしようもない。

一条天皇の御代は女流仮名文学の盛時であるが、漢詩文も盛んで、大江匡衡まさひら（九五二（一〇一

二）文時の弟子慶滋保胤よししげのやすたね（法名寂心じやくしん・九九七歿）具平親王ともひら（後中書王のちの、村上天皇皇子・九六四（一〇

○九）が有名である。

後期に至って、私撰詩文集として、藤原明衡（あきひら九八九～一〇六六）の『本朝文粹』、藤原季綱の『続本朝文粹』、三好為康（二〇四九～一二三九）の『朝野群載』が編せられ、当時の詩文家としては、これらの撰者のほか、匡衡の曾孫大江匡房（まさふさ二〇四一～一一一一）、季綱の孫で平治の乱に死んだ藤原通憲（みちのり法名信西・一〇六九～一二五九）がいる。

しかし、外国の文学様式による作品が精神に乏しいのはやむをえないことで、後代からは和歌和文が平安時代の文学を代表するものと見られた。

2 — 仮名文学の勃興

仮名文学の曙光

清和天皇の御代（八五八）以来、藤原氏のうじ長者が摂政・関白に任ぜられ、その他の氏族は抑えられて政局は安定し、制度万般ととのって平安を謳歌する世となり、文化は進んだ。宇多天皇の御代に菅原道真の建議で遣唐使は廃止され（八九四）、漢詩文万能の一因は崩れ去った。